森浩一先生採集の縄文土器
―京都府京都市北区上賀茂遺跡の北白川C式土器―

松原諒汰

はじめに

同志社大学考古学研究室では現在、1958（昭和33）年に京都府網野町（現京丹後市）から依頼を受けて酒詰仲男先生が発掘調査を実施した、縄文時代中期末葉から後期初頭に属する浜詰遺跡（京丹後市網野町）の総括報告書の作成を進めている。また同志社大学歴史資料館には、1948（昭和23）年に当時学生であった森浩一先生が京都市北区上賀茂遺跡において採集された縄文土器が収蔵されている（図１）。これら２つの遺跡の縄文土器には、縄文時代中期末葉に属する北白川Ｃ式土器が含まれる。これは近畿地方を中心として広域に分布する土器型式であるが、地域性についてはこれまであまり言及されていない。

そこで小文では、浜詰遺跡の総括報告書作成の一環となる、京都府北部の北白川Ｃ式土器と京都府南部の北白川Ｃ式土器の比較・検討を進めるための備えとして、上賀茂遺跡採集の縄文土器の資料化を行った。

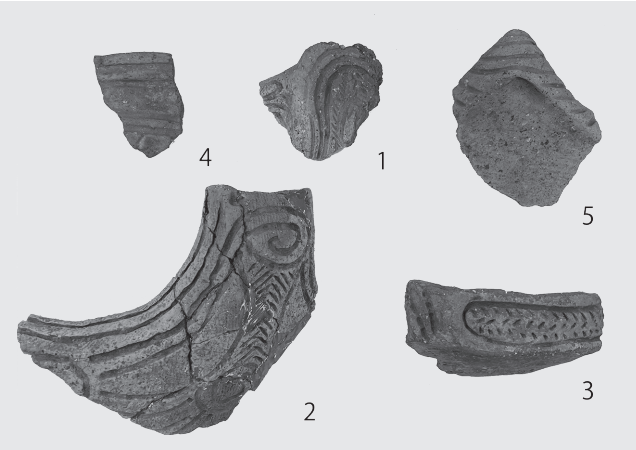

図１　森浩一先生採集の上賀茂遺跡の縄文土器

上賀茂遺跡の縄文土器と森浩一先生

上賀茂遺跡は京都市北区上賀茂本山町に所在する賀茂別雷神社（通称上賀茂神社）の北方に広がる遺跡である。縄文土器・石器が出土し集落遺跡と推定され、古墳時代の土師器・須恵器やガラス製の碗の破片の出土も知られている（坂東1965、坂東・森1966）。遺跡所在地は戦後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）によってゴルフ場建設が計画され、1948（昭和23）年３月に工事を開始し、翌年３月に完成した。この工事によって縄文遺跡は破壊されたものと推定される（坂東1965）。上賀茂遺跡の遺物に関する最初の記録は、京都大学文学部博物館の研究員が1948年に縄文土器破片を約70点採集したこと（京都大学文学部1960）である。なお、同年に森浩一先生も同遺跡で土器を採集されたことを日記に記述している。その後、1951（昭和26）年に発掘調査が行われたが報告書は刊行されておらず、出土遺物の写真のみが残っている（京都市1983、京都府教育委員会2004）。1965・1966（昭和40・41）年の『古代学研究』に坂東善平氏と森浩一先生によって上賀茂遺跡の遺物が紹介された（坂東1965、坂東・森1966）。また京都大学考古学研究会が上賀茂地域での調査を『とれんち』にて報告している（京都大学考古学研究会1990・1991）。1948（昭和23）年10月27日、当時３回生であった森

浩一先生は、上賀茂遺跡において縄文時代中期末葉の北白川Ｃ式土器を含む計５点の縄文土器片を採集したことを日記に記されている。土器に注記された日付は不揃いであったが、この日記により採集の年月日を特定することができた。採集土器には北白川Ｃ式土器と認定できるものが３点、中期末葉の土器片が１点、後期の縁帯文土器が１点であった。報告の便宜上、各土器に１～５の番号を付けた（図２）。なお、括弧内の数字は歴史資料館における収蔵番号である。ところで、森浩一先生が同年７月31日から８月７日にかけて登呂遺跡へ行かれたことなども書き残されている。当時の考古学界の様子を窺い知ることが出来る記録として興味深い。

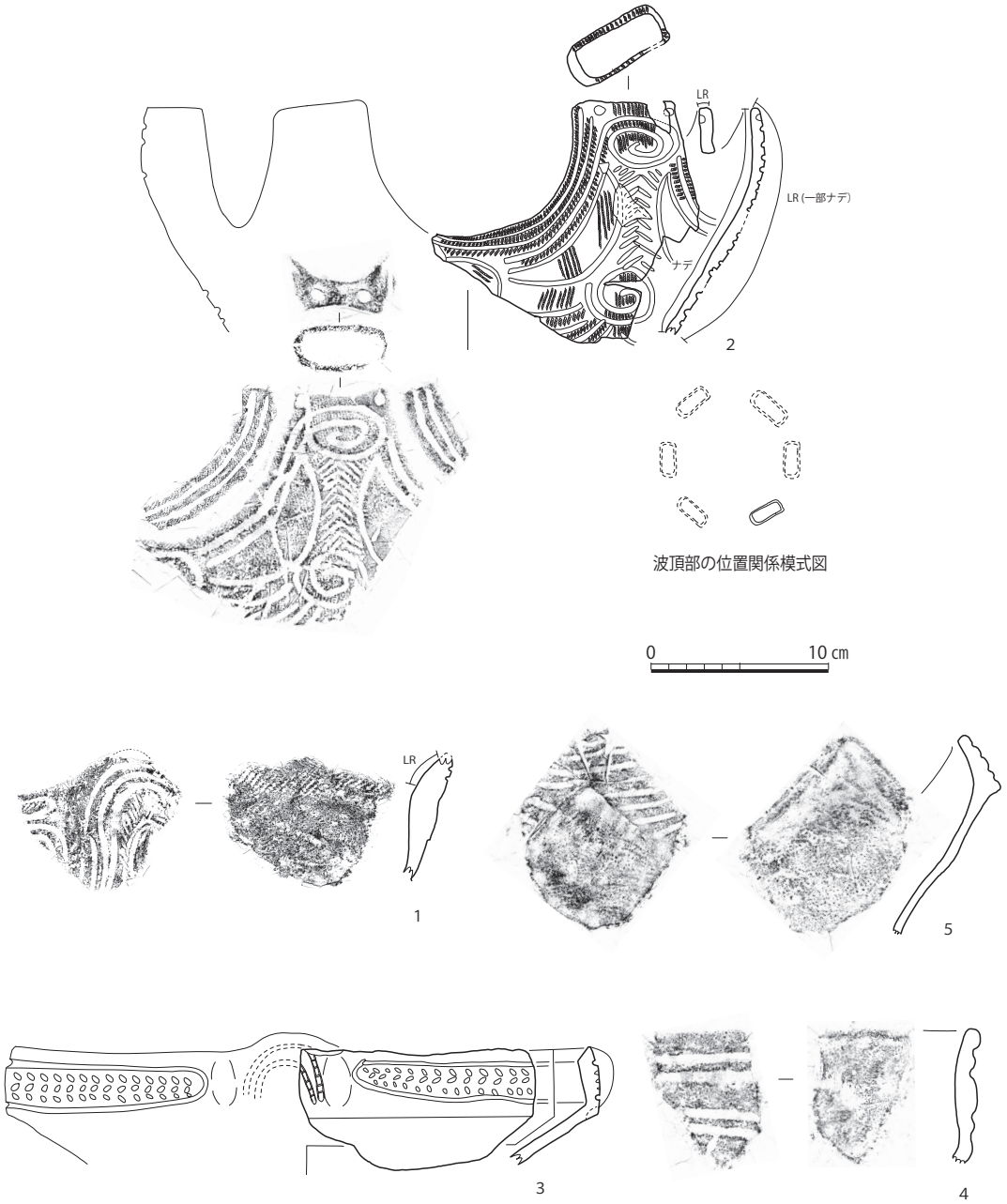

図２　森浩一先生採集の上賀茂遺跡の縄文土器実測図（S＝1/4）

森浩一先生採集縄文土器概要

1（271）：北白川Ｃ式深鉢Ａ類の口縁部である。隆帯と沈線によって渦文が施文され、また口縁部直下には横位の楕円形区画文が配置される。沈線間の隙間や区画文の内部は短沈線によって充填される。口縁部裏面にはLR縄文が施文される。泉拓良氏の分類（泉1985；以下、泉氏の分類では本文献を参照した）に照らせば、渦巻文の周囲を隆帯が囲むことで区画文から独立する深鉢A1類ｄに該当すると思われ、４期区分の内、２～３期に当たると推測される。冨井眞氏の２段階区分（冨井2008；以下、冨井氏の分類では本文献を参照した）においても隆帯の存在から古段階とするのが妥当であると考える。

2（266）：大波状口縁を特徴とする北白川Ｃ式深鉢Ｃ類である。６つの波頂部を有する。渦文が上下に配置される。波頂部は筒型を呈しており、表面と裏面には左右２カ所に凹点が施される。上部の渦文の下部には左右に楕円形区画文が配置され、中間部分は羽状沈線が施される。沈線施文後にLR縄文を施し、一部にはナデが見られる。裏面はナデが施される。波頂部端部にも縄文が施文される。泉氏の分類では楕円形区画間を沈線のみで表す深鉢C1類ｂに細分され、１と同様に２～３期に該当すると考えられる。冨井氏の区分では、筒型波頂部の裏側に凹点が施されている点から、古段階に該当すると考えられる。

3（269）：口縁部が「く」の字状に内折する、有紋土器の北白川Ｃ式浅鉢Ａ類である。口縁部には２列の押引文による主文様と、横位の楕円形区画文が配置され、区画文内は３列の羽状沈線によって充填される。また押引文と楕円形区画文の間には隆帯が貼り付けられる。泉氏の分類では主文様に渦文とつなぎ部に楕円形区画文を持ち、主文様を隆帯で囲んだ浅鉢A2類ａに当たり、２期に該当すると考えられる。冨井氏の区分では、遺構出土でない限りは時期比定が難しいとされるが、口縁があまり内傾していない点から古段階であると推定される。

4（280）：中期末と推定される口縁部の破片である。横位の沈線が上下に２列ずつ施される。１～３の北白川Ｃ式土器との関連として捉えるならば、口縁部が沈線のみの施文という簡素なものである点から、文様退行と判断することが可能である。即ち１～３の土器よりも後出する時期のものと推定される。

5（270）：縁帯文土器で、波状口縁の波頂部である。横位の沈線が施される。

おわりに

今回、森浩一先生が学生時代に採集された上賀茂遺跡の縄文土器について図化し検討を行った。特に北白川Ｃ土器の３点について、１～３は泉氏の区分で２～３期、冨井氏の区分で古段階に収まるものであった。また、４については１～３よりも新しい様相であると考えられる。冒頭でも述べたように、今後は地域が異なる浜詰遺跡出土の北白川Ｃ式土器との比較・検討を進める所存である。

この森浩一先生採集の土器の資料化に関連して、2022年４月４日に同志社大学水ノ江和同先生と有志の学生６名（博士課程後期２回生：廣重知樹、学部３回生：松原諒汰、同２回生：安藤すみれ・橋本佳奈・前田萌香・山本実慶）で上賀茂遺跡の踏査を行った（図３、４）。しかし、坂東氏による報

告通り、遺跡は破壊され現存しないようである（坂東1965）。したがって、残念ながら縄文土器採集は叶わなかった。

最後になりましたが、小文作成に際しては、本学歴史資料館の若林邦彦先生・浜中邦弘先生から多くのご指導・ご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。また、水ノ江和同先生と小島孝修氏からもご助言をいただくとともに、土器実測・拓本等では廣重知樹氏と学部３回生の石田蓮氏にご協力いただきましたこと、お礼申し上げます。

図３　上賀茂第６コース（南より撮影）

図４　上賀茂第６コース（西より撮影）

《参考文献》

・網野町教育委員会　同志社大学考古学研究会 1958『京都府網野町　浜詰遺跡発掘概報』
・京都大学文学部 1960『京都大学文学部博物館考古資料目録』第１部
・坂東善平 1965「京都市上賀茂縄文遺跡」『古代学研究』第41号　古代学研究会　13-16頁
・坂東善平　森浩一 1966「京都市上賀茂の白瑠璃碗の破片」『古代学研究』第44号　古代学研究会　26-31頁
・京都市 1983「考古」『史料　京都の歴史』第２巻　平凡社　34・35、178-181頁
・泉拓良 1985「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』京都大学埋蔵文化財研究センター　163-181頁
・京都大学考古学研究会 1990「上賀茂地域分布調査報告」『とれんち』第42号　5-12頁
・京都大学考古学研究会 1991「上賀茂地域調査報告」『とれんち』第43号　31-33頁
・網野町教育委員会 1993『浜詰遺跡発掘調査概要』京都府網野町文化財調査報告 第８集
・京都市埋蔵文化財調査センター編 2003『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局
・京都府教育委員会 2004『京都府遺跡地図』第４分冊
・千葉豊 2008「縁帯文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション　642-649頁
・冨井眞 2008「北白川Ｃ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション　510-515頁
・同志社大学文学部文化史学科 2020『浜詰遺跡発掘調査概報2019　―京都府京丹後市網野町所在の縄文時代遺跡―』
・京都ゴルフ倶楽部上賀茂コースウェブサイト　2022年８月７日閲覧https://www.adachi-group.co.jp/kyoto/kamigamo/

《図版出典》

・図１、３、４執筆者撮影
・図２執筆者作成